様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２１ 日現在

機関番号：３２６２５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2022
課題番号：１７Ｋ０１８２３

研究課題名（和文）海外在住家庭における親の養育スタイルと学齢期の子どものグローバルアイデンティティ

研究課題名（英文）Parenting Styles of Overseas Families and the Global Identity of School-age Children

研究代表者
平田　裕美（HIRATA, HIROMI）

女子栄養大学・栄養学部・准教授

研究者番号：６０４０１５８５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、海外に在住する子どもの円滑な心身の成長を促進させる環境整備の必要性から、海外在住の日本人父親・母親の養育、居住国の文化・風習、学校教育と親と子どものグローバルアイデンティティについて質問紙調査・半構造化面接調査を実施した。結果、永住/長期滞在する親と子どもによる日本人学校、日本語補習授業校、現地・国際学校の「どの学校に通学するのか」の選択には子どもの状態と言語習得を含む学習への父親と母親の関与、居住国の教育政策に関する情報量が影響していた。さらに日本人/日本人以外の父親・母親の比較調査より、親が考える継承文化・教育と民族性を含むアイデンティティに関わる新たな課題が明らかにされた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究では海外在住の親の養育、子どものアイデンティティを分析してきたが、母語は話せても母国文化の価値基準を理解できず帰国後に苦しむ、カウンターカルチャーショックに関する意見も散見された。将来日本で暮らす場合への備えの点でも、複数の文化に通じた人材育成の点でも、海外で日本文化に触れる機会は貴重であり、それを担う補習授業校の役割の重要性が明示された。この点にも本研究成果の学術的・社会的意義を有する。

研究成果の概要（英文）：This study evaluated the parenting styles of Japanese parents living overseas, along with the culture and customs of their country of residence, their views on their children's education, and the global identity of the families through questionnaires and semi-structured interviews. The results indicated that the choice of schools, i.e., Japanese schools or the combination of local/international schools and Japanese supplementary school, for parents and children residing long-term or permanently abroad hinged on the child's situation, parental involvement in education including language acquisition, and knowledge of the host country's educational policies. Furthermore, the comparison of Japanese and non-Japanese parents unveiled new challenges related to identity, including heritage education, norms, and ethnicity.

研究分野：発達心理学

キーワード：グローバルアイデンティティ　養育スタイル　父親・母親　海外在住家庭　補習授業校　異文化理解　言語習得　居住地コミュニティ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

海外在住家庭の増加に伴い、帯同する子どもの継承語教育や進路選択に注目した報告が散見される。言語習得では、第一言語（母語）の基盤無くして、第二言語の習得は難しいという二言語相互依存説（Cummins and Swain、1986）が提唱されているが、第一言語（母語）の基盤や生活準備なく、居住地の学校生活を強いられる児童・生徒の事例より、年齢相応に自分の意思を語ることができないダブルリミテッドに育つ危険性が指摘されている（たとえば、栗原・森、2006）。また幼少期からの海外在住経験により、「日本人として生きていくのか、現在住んでいる国の人として生きていくのか」など、民族性を含む子どものアイデンティティ混乱に関する報告からも、海外在住経験と子どもの心身への負荷との関連には警鐘が鳴らされている。しかしながら、海外に渡航予定、あるいは海外在住の親に、これらの報告や知見が十分に伝わっているとは言い難い現状がある。海外に在住する日本人の子どもの学習に関する見解は見られるが、部分的な解釈にとどまっており、子どもの発達段階に着目した言語習得や民族性を含むアイデンティティ形成機序と子どもを取り巻く環境要因との関係性や因果関係の検討については未だ明らかになっていない。

２．研究の目的

本研究では、出身国から離れて生活する子どもの円滑な心身の成長を促進させる環境整備の視点から、海外在住の日本人父親・母親の養育、居住国の文化・風習、子どもの学校教育への考えが親と子どものグローバルアイデンティティ形成にどのような影響を及ぼしているのかについて検討することを目的とした。

３．研究の方法

（１）調査対象・地域

・質問紙調査（調査協力者　計 1354 名；父親 638 名・母親 716 名）

日本人学校・日本語補習授業校に通う生徒の日本人/日本人以外の父親・母親

・半構造化面接調査（調査協力者　計 104 名；男性 26 名・女性 78 名）

長期在住、永住家庭の日本人/日本人以外の父親・母親、子ども

日本語補習授業校の理事、日本人学校、日本語補習授業校の教職員

海外所在の日本人主催の非営利・非宗教・非政治団体役員・会員

・対象地域

オーストラリア連邦、ニュージーランド、シンガポール共和国、イタリア共和国、ポルトガル共和国、オーストリア共和国、ドイツ連邦共和国

（２）調査内容

質問紙調査では日本語版と英語版を作成した。家族要因として、父親・母親の養育には、Baumrind（1978）の親と子どもとのコミュニケーションを主とする応答性、子どもの行動を

管理／成熟への要求を主とする要求性に基づいて尺度化された『PAQ：Parental Authority Questionnaire（1991)』の著者 John,R.Buri 氏に日本語版作成の許可（2015 年 8 月 20 日）を得ていたので、Maccoby&Martin(1983)の養育スタイルも参考に、PAQ（日本語版)、自己成長主導性と筆者作成の養育行動尺度・養育連携尺度を検討することとした。養育に関する規定因として、本研究ではレジリエンスと自尊感情について尋ねた。居住国の文化・風習要因として、居住地コミュニティへの関与は日本人主催と居住地主催に分けて尋ねた。多様な文化や風習に関わる志向には『ISS：Intercultural Sensitivity Scale（2000)』の著者 Gui-Ming Chen 氏に日本語版作成の許可（2017 年 12 月 5 日）を得て利用した。

子どもの学校教育との関連では、平成 30 年度から、日本からの派遣教員が在籍する日本人学校では小中連携を踏まえた英語教育に取り組み、日本語補習授業校では、補習授業校に通う生徒の在籍校（現地校・インターナショナル校等）教育を通じて、日本と派遣先国の文化・風習、歴史的経緯への理解を深めるための勤務体制や校務分掌に配慮が求められた在外教育施設派遣教師増員が進められている。このような背景から、日本人学校の居住国の文化・風習を理解するための現地校との交流と、日本からの派遣教員の有無に関係なく、児童・生徒が日本の文化・風習に触れる工夫をしながら継承語による教育に取り組む日本語補習授業校への父親・母親、児童・生徒、そして卒業生の考えについて自由記述を含めた形式で尋ねた。さらに海外で子どもを育てることにおける長所と短所、課題、子どもの学校選択に関する回答を依頼した。半構造化面接では、居住地コミュニティへの関与、学校選択、継承語教育、グローバルアイデンティティに関わる事項について対面式で尋ねた。データ分析には、SPSS version27 AMOS(IBM)を用いた。

倫理審査委員会の承認；118 号、144 号、164 号、188 号、243 号、270 号、438 号

４．研究成果

調査 1. 国内の大学生 328 名（男子 162 名、女子 166 名）の定位家族に関する回想より、そのアイデンティティの統合を促し、混乱を防ぐ父親・母親の養育スタイル、さらに父親・母親の養育行動がどのような条件時に、より表出されるのかを検討した。結果、権威的養育スタイルの父親・母親に育てられた大学生は、男女共に、他の養育スタイルの親に育てられた大学生より「親は連携して私を育ててくれていた」と回想していた。アイデンティティの統合では、権威的養育スタイルの親が権威主義（独裁)、放任的養育スタイルの親よりも高く、混乱では、権威主義（独裁)、放任的養育スタイルの親が権威的養育スタイルの親よりも高かった。国内の大学生 329 名(男子 164 名、女子 165 名)を対象に、就職活動、職場、教育現場などにおいて人生の転機に必要とされる Robitschek（1998）による自己成長主導性（PGI:Personal Growth Initiative)、自尊感情、親の養育スタイルとの関連を検討した。結果、権威的養育スタイルの親は、男女の PGI を促進させ、自尊感情を安定させていた。だが、権威主義（独裁）養育スタイルは女子大学生の変化への準備に関する考えに否定的に影響していた。以上は、Baumrind(1978)と Maccoby& Martin(1983)が提唱する養育スタイルについての先行研究を支持する結果であったことから、本件における養育行動尺度、養育連携尺度の信頼性と妥当性が確認された。

調査 2. 海外所在の日本人学校、日本語補習授業校にて、質問紙調査（日本語版・英語版）を学級担任から配布・回収と学校より各家庭にメール依頼・オンライン回収で実施した。結果、子どもとの会話を中心とした応答性では、父親・母親共に、肯定的に未来を見据えるなどのレジリエンス、居住国の人の文化や風習を理解しようとする志向が高いほど、子どもとの会話を中心とした養育行動が多かった。家庭のしつけに関する要求性では、アジア圏と英語圏における父親・母親に差異はなかったが、日本人父親と母語が日本以外の父親には差異が確認された。日本人父親は母語が日本以外の父親よりも「注意する」「助言する」を示す要求性が高く、「禁止する」を示す要求性が低いという特徴が明らかにされた。この違いについては半構造化面接にて具体的に尋ねることとした。次に「海外で子どもを育てる」長所・短所では、日本人父親・母親は、長所として「多様な文化に触れられる」など、「異文化理解」「多様性」に関する記述が多く、短所では「日本の四季、由来する習慣などに触れられる機会が少ない」など、「カウンターカルチャーショック」に関連する記述が散見された。一方、母語が日本以外の父親・母親は、長所として「自分のルーツを考えることができる」など、先祖／祖先、出身国の成り立ちに関する記述が多く、短所では「日本人だからといって、日本の文化や価値を必ずしも持っているとは限らないと思う」など、父親・母親それぞれの「継承文化・風習」への考えや「価値観」への疑問が記されていた。「海外で子どもを育てる」課題では、日本人父親・母親は①言語習得、②学校選択、③学習への関与の順に挙げていたが、母語が日本以外の父親・母親は①アイデンティティ、②（居住）国の教育政策、③言語習得の順に挙げていた。

調査 3. 調査 2 の結果を受けて、対面式半構造化面接を行った。父親・母親の養育では、家庭のしつけに関する要求性について、日本人父親は、注意はする、叱る時は叱るが、まずは子どもの意見を聞くという関わりを重視する意見を述べていた。一方、母語が日本以外の父親は、家族内ルールや子どもの友人関係については、子どもに有無を言わせない、禁止を意味する発言が多く、同席していた母親からも、その考えを父親が行動に示していることが確認された。子どもの学校選択では、英語圏に駐在、または移住の日本人母親は「英語圏に来たのだから現地校通学」という現地校通学志向が強かったが、日本人父親は「日本人のものの見方を考えると」など、子どもの学校選択には、かなり慎重であることがうかがえた。親と子どものアイデンティティでは、現地校通学の子どもの親より「わたしは日本人の考えなのか、距離を感じる」など、親自身のアイデンティティの「ゆらぎ」に関する発言が認められた。現在、日本語補習授業校に在籍の生徒、そして卒業生からは「日本人らしく」など、一時帰国や日本への進学時の関係者の言葉の表現、就職してからの上司や同僚の発言に関する意見が散見された。その一方、日本語補習授業校については、親も子どもも「補習校は日本人であるということを忘れさせないでくれる場所」など、「日本とのつながり」に関連する意見を述べていた。海外所在の日本語補習授業校は、子どもの学習する場であるだけではなく、子どもを介して保護者である親が集まり、海外で生活をする上での情報交換ができるなど、散在する日本人コミュニティへのプレゼンス機能をもつことが理解された。さらに日本語補習授業校の理事、校長、教職員、居住地における日本人主催の非営利・

非宗教・非政治団体の学校担当役員、会員の発言では、日本語補習授業校は児童・生徒が通う現地校とインクルーシブ教育やキャリア教育に関する連絡網をかなり緊密に築き上げ、常に情報交換をしていることが明らかにされた。アジア圏、ユーロ圏の日本人学校校長の発言からも、海外所在の日本人学校、日本語補習授業校は多言語主義と複数言語主義を踏まえ、居住国の教育政策に関する取り組みをしなければならないことが認められた。この点については、子どものバイリンガリズムと親の教育に関する志向と同様に、今後の検討課題としたい。

本研究では、海外で暮らす日本人の親や子どもの安心感、安全につながる環境整備の視点から、親と子どものグローバルアイデンティティ形成機序を検討してきたが、日本語補習授業校は、海外在住の親と子どもの「心の拠り所」であり、「日本人である」に必要不可欠な存在であることが示唆された。海外在住日本人の居住地コミュニティにおける日本語補習授業校のプレゼンス機能と共に、このグローバルアイデンティティ規定因の解析をこれからも継続したいと考える。

５．本研究の成果発信に関する研修会・講演会（計　10　件）

2017 年 9 月 21 日 パース日本人学校 教職員研修会（オーストラリア連邦）
2018 年 10 月 30 日 シンガポール日本人学校チャンギ校 講演会（シンガポール共和国）
2018 年 11 月 3 日 カンタベリー補習授業校 講演会（ニュージーランド）
2018 年 11 月 5 日 ウェリントン補習授業校 講演会（ニュージーランド）
2019 年 11 月 7 日 シンガポール日本人学校クレメンティ校 講演会（シンガポール共和国）
2020 年 1 月 18 日 ローマ日本語補習授業校 教職員研修会（イタリア共和国）
2020 年 1 月 18 日 ローマ日本語補習授業校 講演会（イタリア共和国）
2020 年 1 月 23 日 ウィーン日本人国際学校 教職員研修会（オーストリア共和国）
2020 年 1 月 25 日 リスボン日本語補習授業校 先生と親の講演会（ポルトガル共和国）
2023 年 2 月 8 日 ベルリン日本語補習授業校 講演会（ドイツ連邦共和国）

６．研究組織

（１）研究代表者

平田裕美（HIRATA HIROMI）女子栄養大学　栄養学部　准教授　研究者番号：60401585

（２）研究協力者

パース補習授業校（オーストラリア連邦）
カンタベリー補習授業校、ウェリントン補習授業校（ニュージーランド）
シンガポール日本人学校チャンギ校、クレメンティ校（シンガポール共和国）
ローマ日本語補習授業校（イタリア共和国）
ウィーン日本人国際学校（オーストリア共和国）
リスボン日本語補習授業校（ポルトガル共和国）
ベルリン日本語補習授業校（ドイツ連邦共和国）

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 平田裕美	４．巻 6
２．論文標題 海外在住日本人家庭における子どもの言語習得と学校選択ー多様な言語環境で育つ子どもとバイリテラシー形成	５．発行年 2021年
３．雑誌名 女子栄養大学教職課程センター年報	６．最初と最後の頁 21ー31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 平田裕美	４．巻 4
２．論文標題 インクルーシブ教育におけるone track方式とmulti track方式-伊・英の現状と日本の特別支援教育における課題	５．発行年 2020年
３．雑誌名 女子栄養大学教職課程センター年報	６．最初と最後の頁 5-12
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 平田裕美	４．巻 89
２．論文標題 父親・母親の養育スタイルに関する大学生の回想とアイデンティティ形成	５．発行年 2018年
３．雑誌名 心理学研究	６．最初と最後の頁 221-228
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4992/jjpsy.89.16071	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Hiromi Hirata&Toshimitsu Kamakura	４．巻 23
２．論文標題 The effects of parenting styles on each personal growth initiative and self-esteem among Japanese university students.	５．発行年 2018年
３．雑誌名 International Journal of Adolescence and Youth	６．最初と最後の頁 325-333
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1080/02673843.2017.1371614	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 平田裕美	4．巻 2
2．論文標題 学校教育活動における進路指導・キャリア教育で育成できる力－発達段階別にみるキャリア・カウンセリングとその方向性	5．発行年 2017年
3．雑誌名 女子栄養大学教職課程センター年報	6．最初と最後の頁 23－29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計5件（うち招待講演　0件／うち国際学会　5件）

1．発表者名 Hiromi Hirata
2．発表標題 Place attachment of families living overseas;Japanese parents’cognition of parenting, and lanuage acquisition.
3．学会等名 5th World Conference on Social Sciences, Berlin（国際学会）
4．発表年 2022年

1．発表者名 Hiromi Hirata
2．発表標題 Ideas on children's careers and cross-cultural understanding of parents of families living overseas.
3．学会等名 32nd International Congress of Psychology, Prague online（国際学会）
4．発表年 2021年

1．発表者名 Hiromi Hirata
2．発表標題 Effect of ready-made meals on family eating styles, abnormal eating behaviours, and cognitive chewing in adolescents.
3．学会等名 31st International Conference on Adolescent Medicine and Child Psychology, Barcelona（国際学会）
4．発表年 2020年

１．発表者名 Hiromi Hirata
２．発表標題 Effects of resilience and cross-cultural understanding in parents living abroad on their parenting attitudes.
３．学会等名 33rd Annual Conference of the European Health Psychology Society, Dubrovnik（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Hiromi Hirata
２．発表標題 Relationships between parenting styles of mothers living overseas, their self-esteem and family cohesion.
３．学会等名 15th European Congress of Psychology, Amsterdam（国際学会）
４．発表年 2017年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関